



・巻頭言……………1	・豆手帖④⑦……………3
・研究所活動報告……………2	・催し物案内等……………4



民俗学と クラシック音楽の民族性

法学部教授 福田 宏

昨年度より民俗学研究所のメンバーに加えて頂いております。法学部にて国際関係論など政治学関連の科目を担当していますが、中東欧のナショナリズムと音楽に関心を持っていることもあり、その源流に当たる「フォルクスクンデ（ドイツ語で民俗学を意味する語）」については以前から気になっておりました。独語圏で民俗学が始まる重要なきっかけの一つとなったのは、民衆の歌にこそフォルク（Volk）の魂が発露するというヘルダーの18世紀末における「発見」です。フォルクという概念は幅が広く、民衆とも民族とも、あるいは人民とも国民とも訳される言葉ですが、この「発見」が、19世紀の中東欧において音楽とナショナリズムを結びつける呼び水となります。

例えば、私が専門とするチェコに関しては、19世紀のスメタナやドヴォジャークといった「国民楽派」の作曲家たちが、民謡を民族文化の核心と見なし、作品のなかに取り込みました。とはいえ、民衆の音楽を使えばチェコ音楽になるという単純な話ではありません。彼らが直面していたのは、(1) どのような要素をもってチェコの音楽と判断するのか、(2) そもそも絶対的な意味でのチェコ音楽は存在するのか、(3) 土俗的な要素を用いて「芸術音楽」（いわゆるクラシック音楽）を生み出すことは可能なのか、といった根本的な問題でした。スメタナは、当時最先端の音楽として持てはやされていたリストやヴァーグナーに惹かれ、自らの作品に活かそうとしましたが、「ドイツかぶれ」とか「ヴァーグナーの亜流」といった批判を浴び、民謡そのものを重視する「保守派」陣営から敵視されました。かたや民謡的素材を料理することに長けていたドヴォジャークは、素朴なメロディーを羅列しただけでは「芸術」にはならないとして、「進歩派」から攻撃されました。どちらが本物のチェコ音楽な



のかという、このいわゆるスメタナ＝ドヴォジャーク論争は、彼らの死後である20世紀初頭に激化し、最終的には1960年代まで尾を引くことになります。

しかしながら、音楽のなかに民族の本質を見いだすことは可能なのでしょうか？例えばドヴォジャークは、ニューヨークの私立音楽院に院長として招かれ、数年間にわたってアメリカに滞在したことがあります。その際には、先住民の伝統音楽や黒人霊歌に魅了されてもいました。アメリカ独自のオペラを作りたいという要望を受

けた彼は、その題材として、先住民の英雄を謳ったロングフェローの叙事詩「ハイアワサの歌」を選んでいました。このオペラは完成に至りませんでしたが、当時のスケッチの一部は代表作のチェロ協奏曲や交響曲第9番にも転用されたと考えられています。とすると、これらの作品はどこまでチェコ的なのでしょうか？

結局のところ、音楽をどのように理解するかという人間の感覚自体が時代や社会によって変わることを考えれば、そこに民族の本質を求めることには無理があります。しかしナショナリズムが高まった時代には、「科学的に」各民族の音楽が分析され、さらには優劣が付けられるようになりました。ヘルダーが編纂した1778-79年の『民謡集』では18におよぶ言語の歌詞がランダムに配置されており、民族ごとに民謡を分類するという発想が見られません。しかし後の時代には、ナショナリズムの文脈でヘルダーを捉え、ドイツ民族の優秀さをいち早く「発見」した先駆的人物と理解する解釈まで現れました。とはいえ、ヘルダーが見ようとしていたのは特定の民族（フォルク）ではなく、人間（フォルク）そのものであったようにも考えられます。ナショナリズムが再び高まりつつある昨今では、民族や人種に関わりなく人間の本質を捉えようとする視点は、特に重要性を増しているのではないのでしょうか。（所員）

研究所活動報告

◇新規プロジェクト紹介◇

令和7年度 研究プロジェクト

「視覚表象文化の民俗学的研究」

研究代表者 及川 祥平

本研究はみる／みせる、みられる／みせられるといった人びとの視覚をめぐる生活のあり方を、表象を焦点としながら明らかにすることを目指す。「かたちのないものを視覚化する営み」「視覚化されたものとのつきあい」「視認されることをめぐる諸実践」といった諸点への民俗学アプローチを試みる予定である。そこでは視覚をめぐる権力や抑圧、または欲望といった問題、製作と媒介、改変、鑑賞という営みのあり方も問われることになるだろう。メンバーとしては伊藤龍平、大道晴香、今野大輔、佐山淳史、高木大祐、辻本侑生、俵木悟、廣田龍平、山川志典らに参画いただき、研究生として押見皓介、真保元らが参加する。

視覚優位の時代と称される現代社会においては、各種のヴィジュアルイズされたイメージが氾濫し、それが様々な局面で生活者の選択に影響を及ぼしている。こうした点は、ドイツ語圏の民俗学（ヨーロッパ民族学／経験文化学）においては早くから関心の対象とされてきた。スウェーデンの民族学者ニルス・アルヴィッド・ブリングウス（Nils-Arvid Bringéus）がドイツ語論文「Ethnologische Bildforschung（民族学的図像研究）」（『Ethnologia europaea』12、1981年）において述べたように、広域に流通し、生

活者への潜在的な影響力の強い図像ほど、民俗学的興味の対象と考えねばならない。また、ブリングウスの議論は、図像を資料ではなく「コミュニケーションの道具」として捉える視点を打ち出した点でイコノロジーの提唱とは相違し、むしろ、視覚表象をめぐる人の営みを捉えようとしている。言うまでもなく、各種の図像は社会における意思疎通に役立てられているし、私たちの意思はそれに方向づけられている。とりわけ、誰もが情報発信者であり得る今日の社会に対峙しようとするとき、画像や動画を紹介して行なうコミュニケーションのあり方を、その歴史性を念頭に解き明かすことは急務といえる。

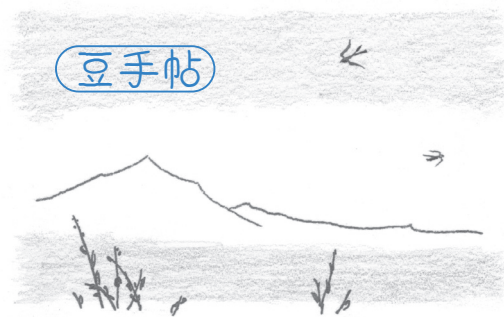
日本の民俗学においても視覚表象をめぐる研究は相応に存在する。絵馬は願意や謝意を神仏に届ける手段として（コミュニケーションの手段として）分析されてきたし、現代における絵馬とサブカルチャーとの接合もすでに注目されている。また、家族写真（及びアルバム）をめぐる研究は、まさに視覚的なものをめぐるコミュニケーションのかたちを明らかにしようとしてきた。本研究では従前の日本の民俗学の成果を国際的な動向のもとに位置づけなおすことも試みたい。（所員）

研究所刊行物

『民俗学研究所紀要』第49集 令和7年3月25日発行 A5判213頁

＜収録内容＞

- | | |
|--|------|
| ・日常学・現在史・民俗学 ―柳田國男『世相篇』をどう読むか― | 岩本通弥 |
| ・西日本の八朔節供 ―人形・馬を作り、飾り、贈る習俗― | 松崎憲三 |
| ・お答えを差し控えていただきます
―山村調査「採集手帖」における不記載項目― | 川田牧人 |
| ・柳田國男古稀記念会から日本民俗学会の創設へ
―『古稀記念会覚書』『古稀記念会出席者覚』の翻刻と分析を中心に― | 板橋春夫 |
| ・千葉県鴨川弁天島に関わる地域社会と信仰の考察 | 宇田哲雄 |



橋と〈ヘンダイアディス〉

―新たな発見へと誘う結合装置―

本学名誉教授 筑波大学名誉教授 森田 孟

橋！二地点間の空間を繋ぐ通路、この橋なるものに、私は年少時から心を惹かれ続けた。

これまでに様々な国内・海外の数々の名だたる橋を探訪し、渡れるものは渡ってきた。それらについては、稿を改めて詳述したいが、ここでは二、三、その名を挙げるに留めよう。ギリシャ西南部の湾に架かる2880m五径間連続斜張橋「リオ・アンティリオ橋」、タラゴナの「ラスフォラス水道橋」、スペインはビルバオ近郊の河の水面上55mの空中160mを繋ぐ「ビスカイア運搬橋」、プラハの「カレル橋」、北海道の「タウシュベツ川橋梁」、青森県の日本一長い木造三連太鼓橋300mの「鶴の舞橋」、島田の世界一長い897.4m〔厄無し〕木造歩道橋「蓬萊橋」、甲斐の「猿橋」、熊本県の国宝「通潤橋」、長崎の「眼鏡橋」、祖谷の「かずら橋」、岩国の「錦帯橋」、等々。

橋が私を感動させるのは、それが何かと何かを一つに繋ぐものだからであろう。「教皇」「pontifex」の字義は、「道」の語幹である「橋」を作る人、であった。聖職者は地上の人々と天上の神との間に架橋する人なのだ。教育とは、後進を未来に羽ばたかせるための架橋作業であり、読書とは、読者と作者とを結ぶ書物（橋）を渡りながらの、新たな橋造り営為である。人生とは、生と死を繋ぐ橋であり、生きるとは、日々営々と堅牢な橋を架け続けてゆく営みに他ならない。

橋といえば私は直ぐ、〈ヘンダイアディス〉（二詞一意）を想起する。二つの名詞ないし形容詞のAとBを、等位接続詞の“and”で並列した句が、その“and”を橋として①「形容詞＋名詞」か、②「副詞＋形容詞」の、AでもBでもないCなる別の一つの意味になる表現法である。ギリシャ語の「二つによって一つ」の意の“hèn dià dyoîn”からの英語“hendiadys”の初出は1586年（*OED*）だ。

慣用となっている例では、①“bread and butter”→“buttered bread”（「パンとバター」→「バターを塗ったパン」）／“death and honor”→“honorable death”（「死と名誉」→「名誉の死」）②“rare and happy”→“rarely happy”（「稀なと幸福な」→「めったにない幸福な」）／“nice and cool”→“nicely cool”（「良いと涼しい」→「とても涼しい」）など、典型である。

シェイクスピアにも有名な例がある。マクベスが包囲された城中で孤立し、自らの最後を予感しながら人生の儚さ、無意味を嘆く、“Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow”「明日また明日また明日」で始まる10行の科白の終りに出てくる表現である。“… it is a tale/Told by an idiot, full of sound and fury, /Signifying nothing.”（*Macbeth*, V.v.19-28）。W.Faulkner(1897-1962)の代表作『響きと怒り』*The Sound and the Fury*(1929)の表題がここから採られたとされている“sound and fury”「騒音と憤激」の二詞は“furious sound”「荒れ狂った叫び声」なる一意となる。ちなみに、この箇所訳の邦訳は、最初の坪内逍遙訳の「騒ぎも意気込みも」を始め、多くは「声と怒り」など二語の並列と採るが、小津次郎訳は、「白痴のお話だ、何やらわめき立ててはいるものの、何の意味もありはしない」と、二詞一意に解釈されている。（傍点森田）

橋と表現については、前回話柄にしたあの、相反する意味の二語が直に結合した「オクシモロン」も直接とは見かけだけで、実は眼に見えない橋で接合されているのだと思われる。同じくオクシモロンとは言え、それぞれの撞着の度合やニュアンスが微妙に異なって感取されるのは、二語を繋いでいる不可視の橋の種類（石橋、木の橋、吊橋、鉄橋、等々）の違いに依るものであろう。

柳田國男の膨大な著作中、「橋」が表題に含まれているものは八篇あるが、中でも1937年12月と翌年1月に発表された「橋の名と傳説」は、「コウロギバシ」から「ヒマネキバシ」に到る24橋の各々について、行き届いた情報が詳述されており、他の七篇（「淀橋の橋姫祭」「出水被害と架橋権問題」「細語の橋」「西行橋」「橋姫」（一つ目小僧その他）「味噌買橋」「日本橋と夢」）と共に、私以外の〈橋マニア〉も、満喫させられることだろう。

柳田國男(1875-1962)は今年、生誕150年を迎えた。この機会に、柳田翁によって学問の世界に新たに架けられた「民俗学」という強靱な橋を、渡り直してみると共に、翁の誕生と死去、二詞の一意であるその生涯を、改めて辿ってみたいものである。

《民俗学研究所公開講演会》

川島秀一氏

漁と商いのあいだ 一魚を売る漁師の民俗

予約不要です
直接ご来場下さい

日 時：令和 7 年 6 月 14 日（土） 午後 1：30～3：30

会 場：成城大学 3 号館 1 階 311 教室

〔講演者略歴〕

1952 年 宮城県気仙沼市生まれ

法政大学社会学部卒業。博士（文学）。元日本民俗学会会長。神奈川大学特任教授、東北大学災害科学国際研究所教授などを経て、現在、同研究所シニア研究員。

〔おもな著書〕

『漁労伝承』（法政大学出版局、2005 年）

『魚を狩る民俗一海を生きる技』（三弥井書店、2011 年）

『いのちの海と暮らす一日本の沿岸漁業民俗誌』（富山房インターナショナル、2022 年）、等。

《所員研究例会》

日 時：令和 7 年 7 月 10 日（木） 午後 2：40～5：00

会 場：成城大学 2 号館 1 階大会議室

発表者・テーマ（発表順）

榎 美香 氏（研究員）「民具を研究すると何が分かるのか～民俗知識による分類法～」

荒井浩幸 氏（研究員）「令和の「山村調査」報告—平成の大合併後の新見市、奥出雲町の民俗—」

◇ 人事

・民俗学研究所主事：小澤正人 文学学部教授（令和 7 年 4 月 1 日発令 再任）

編集後記

民研ニュース 148 号をお送りします。巻頭言には新たに民研に加わっていた福田宏所員から「民俗学とクラシック音楽の民族性」との題名でご寄稿をいただきました。チェコにおける民謡とクラシック音楽の関係から、国民・民族・ナショナリズムのあり方を考察された、示唆に富む内容となっています。現代において「民族や人種に関わりなく人間の本质を捉えようとする視点は、特に重要性を増している」という指摘には強く共感します。活動報告では及川祥平所員からプロジェクト「視覚表象文化の民

俗学的研究」について報告をいただきました。伝統的な民俗学研究に新たな視点をもたらす活動として注目されます。豆手帖では森田孟名誉教授から「橋と〈ヘンダイアデイス〉—新たな発見へと誘う結合装置—」として、「橋」をテーマとして含蓄に富む文章をいただきました。ご寄稿いただいた皆さまに感謝の意を表したいと思います。恒例の公開講演会は東北大学の川島秀一先生をお招きして開催いたします。また所員研究例会も榎美香研究員、荒井浩幸研究員を発表者として開催します。ご興味のある方は是非ご参加ください。

民俗学研究所ニュース No. 148

令和 7 年 4 月 25 日発行

編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事 小澤 正人

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

TEL：03-3482-9097・9098 Fax：03-3482-7763

mail：minken@seijo.ac.jp

